

目次

もと呉服店（爆心地から一七〇メートル）……………	5
もと防空作戦室（爆心地から七九〇メートル）……………	31
もと陸軍被服支廠倉庫（爆心地から二、九七〇メートル）……………	59
似島（爆心地から約八〜一〇キロ）……………	91
ひろしまを語り継ぐこと……………	118
記憶をつなぐ、「場」をめぐる……………	124
おわりに……………	132

広島市の「被爆建物リスト」に登録された建物は、計八十六件。
(爆心地から半径五キロ以内。二〇二〇年現在)

もと呉服店

(爆心地から一七〇メートル)



また、やってる。「肩の力を抜いて、いいっち、にい、さあん……」

修は、ちっと舌打ちしながら、細く開けていた庭側の窓を閉めた。母さんは、ラジオ体操が好きだ。一日中、家でパソコンに向かって仕事してるから、十二時と三時の体操は、「息抜きと体力維持に欠かせない」と言っつて、ラジオをつける。ふつう、ジムとかに通うだろ、と修が言っつても、母さんは平気な顔でボリュームを上げ、庭に出る。小さな庭の、でかい音。きつと近所のひとは、うんざりに違いない。

修は、ラジオ体操が嫌いだつた。もともと、団体行動は苦手だつたし、全国で同じ時間帯に、同じことするなんて、気持ち悪いと修は思っつていた。

「お前んち、毎日、ラジオ体操、やるんだつて？ け、かっこわる」。隣のクラスの耕太が、廊下ですれ違いざまに言っつたことばを、修は思ひ出す。ちようど、その前の授業で、数学の教師に「問題の意味を理解できていないから、こんなおかしな式と答えになるんだ。読解力、ゼロだ」と言われたばかり。ダブルパンチ。廊下の窓から射してくる西日が、目に痛かつた。

その翌日から、修は学校に行かなくなつた。まるで液状化現象みたいに、地面がずるずる足もとで崩れて流れる感じがして、玄関で靴が履けなかつた。中二の秋だつた。

はじめの一週間は、なんだか悪いことをしてようよう、おちつかなかつたけれど、次の週になると、どうでもいいや、という気になつた。部屋でごろごろ、いもむし生活も悪くない。ゲームに飽きると、自転車で川土手を走る。学校では感じられなかつた風が吹いている。それも、悪くなかつた。だから、時間は過ぎていき、修は、登校しないまま、中三になつた。

豆のカレー。またの名を、またかよ豆だけカレー。一度作ると、三日はこれだ。母さんが朝からこれを仕込む日は、家じゆう、ターメリックの黄色い匂いがする。

「冷凍のナンもあるし、サフランライスも炊いた。どう、うれしくない？」

うれしくない。父さんは、あいかわらず長期の出張。姉さんは、家出中。大学の近くで、カレシと一緒に住んでいる、らしい。それでも、母さんは、いっこうにおかまいな